

『INVISIBLE RISK 2』

著：崎谷はるひ

ill：鈴倉 温

この部屋へと近付いてくる足音は軽やかで、それにはたしかに聞き覚えがあった。
(……まさか……)

体調の悪さに鈍っていた心音が跳ね上がる。息を殺し、微動だにできず見つめた先で、立てつけの悪いドアががたがたと揺れる。

震える手から持っていたコップを取り落としそうになり、慌ててそれを流しへ置くとき、音を立てないように気をつけた。なぜかはわからない予感が、杉本に気配を殺させる。

恐ろしく長い時間が流れたような錯覚があつて、杉本は目眩を覚えた。

そして、軋みながらついにドアは開く。

「あ……」

驚いたように目を見開き、杉本を見つめたのは——汐野だった。

「なんだよ、いたのかよ」

小さく舌打ちし、汐野は目を伏せる。杉本はなにも言えず、ただじっと、ひどくなつかしいような気のする——実際には十日あまり離れていただけの、小造りな顔を見つめた。

言葉も出せずに、食い入るように見つめる杉本から目をそらしたまま、汐野は靴を脱ぐ。そして、なにごとかを言いかけた杉本を制するように、早口にこう言った。

「荷物、取りにきただけだから」

(……！)

鋭い痛みが走って、杉本は無意識に胃を押さえる。

汐野は杉本を視界に入れぬよう目をそらし、置きっぱなしになっていたバッグに、手早く身の回りのものを詰めはじめる。

「すぐ出てくから、気にすんなよ」

感情の見えない声で、背を向けたまま汐野は言った。

「し……っ」

「でかい荷物とかは、また取りにくる。それまでほっといて」

そして、膨(ふく)らんだバッグを肩にかけると、挑(いど)むような瞳で笑った。

「長い間お世話になりマシタ」

「！」

硬直する杉本に、鼻先で嘲(せせ)ら笑う。

「ま、こんくらいは言っとかないとね」

そして、ぐるりと部屋を見渡した。一瞬、切ないようなものがその怜(れい)惻(り)な瞳に浮かんだ気がしたが、それもすぐに掻き消えて、いやな目付きで杉本を笑う。

「掃除してねえんだろ、きったねえな。……ま、俺にはもう関係ねえけど」

言いながら、ゆっくりと細身の身体は玄関へと向かう。

(待ってくれ……)

乾き切った唇が虚しく動き、またも声が出ないもどかしさを杉本は味わった。悪寒は

凄まじく、立っているのがやっとだったが、杉本のひどい顔色にも、目をあわせようとしていない汐野は気付かない。

（待てよ……行くな）

玄関にしゃがみこみ、靴の紐(ひも)を結ぶ背中がぐらぐらと遠くに揺れる。その動作がやけにゆっくりとして見えるのは、杉本の感覚が狂っているせいなのかどうか、もう彼自身には判別がつかなかった。

「ん、じゃ」

そして、細身の背中が狭い玄関に立ち上がる。ドアを開き、差し込む逆光で汐野の顔が見えない。

（行くな……行かないでくれ）

あるいは、絶望のあまり眩む目が、まともに機能していないせいかもしれなかった。

「バイバイ」

眩くような小さな声。そして彼は、なめらかに足を踏み出そうとする。

（汐野……っ！）

荒れた喉が、ひゅう、という音を立てて鋭く痛んだ。その音に気付いたかのように、ドアの向こうに消えかける彼が振り向いたような気がして――。

「汐野――！」

嗚れた喉から、ほとばしる声。

わずかな距離を駆け寄ることさえよろめきながら、閉じかけたドアを、こじ開ける。

「なっ……！」

背を向けたままの汐野を玄関のなかに引き戻し、叩きつけるようにドアを閉めた。

「なん――だよ」

「行くな」

不愉快そうな声には答えず、振り返らないままの彼の細い腕を掴み、紡ぐ言葉は哀願の響きを持っていた。

「行かないでくれ……頼むから」

縋るように腕を握り締め、杉本は繰り返した。

彼の前から消えてもいいとさえ思ったのに、こうして姿を見てしまえば、ぶざまに追いつがる自分がいる。

あきらめられない。手放すことなどできない。エゴを丸出しにして、彼の意志を無視してさえ、ここにとどめておきたい自分の身勝手に、痛むほどに噛み締める。

「おまえが……おまえがいなきゃだめなんだ。レコーディングも、どうにもならない」

「歌入れには顔出してやる」

必死の言葉を、冷たい声音が切り捨てる。同時に自身の存在さえ切り捨てられるような辛さに、杉本は歯噛みする。

「それでいいだろ、ボーカルとしての義務は果たし――」

「そうじゃないっ！」

淡々とした言葉尻にかぶせるように、杉本は叫んだ。

ガクガクと足が震えている。傍近くに居る彼の姿さえ見つめることも難しいほど暗くなった視界が、あの夢を思い出させて恐怖が募る。

「そうじゃなくて、それだけじゃなくて！ 俺が駄目なんだ……駄目なんだよ……っ！」

喉がもう限界で、哀れなほどに声が擦れた。視界はいよいよ歪み、くらくらと壁が回

りはじめるのを、うつむいて荒い息を落としながら耐えた。

耳なりがした。崩れてしまいそうな膝(ひざ)を堪えながら、それでも汐野の腕は放さない。

放せなかった。

「どうして？」

綿を詰め込まれたように遠い耳に、細い声が滑り込む。

自らに課した禁(きん)忌(き)を破り、彼にはじめて触れたあの夜ずっと、繰り返された言葉だった。

答えられず、けれど伝えてしまいたくてひどい苦しみに苛(さいな)まれたそれと同じ言葉で、彼は問いかけている。

杉本は深く息を吸い込んだ。肺のあたりが痛んで、ようやくに唇に乗せた言葉は、幾重にも封印されたせいでほどくことが恐ろしい。

「俺は……俺は、おまえが。……おまえのことが」

恐怖はそのまま、震える声となって喉からこぼれていく。

「好きなんだ」

本文 p56～61 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>